

## 紅髪のくノ一(アカガミニノクノイチ)

の嘉そはそ肩そ息身ガ短  
特山れつれとのを体サ  
異藩はきゆ太ま吐をりう  
なお淫りえもまきのとめ  
装抱靡とにもピ出け茂き  
束えさ月肉以クリぞみ声  
だのと明付外をきりが胸ら  
女機忍動の薄もらを女：  
衆性中よい動も押さ転：  
をでい布かやがえが  
重も身體覆なくて怒た  
『荼枳尼』視してのうな地氣  
た取曲のつにを  
れ線みた沈はらん  
たが 女んでん  
の姿いだ  
はく

「茂銀次め『静月陰林今先風ほ  
うみののりかに林を真ん中にあいていた  
うぐの閃瞬込へが吸逆送するよう  
うのくナイ』が力ツツと音を立て木の幹へと  
中上に廣がる空に星など無かつた  
に雲上聞こえで冷やかに鳴いていた虫どもの声も  
かにただすら無くろ  
に林を照らす月光に一瞬だけ映し出される

あつ丸そおなみを  
そりむける帯  
蒼びた肩のな  
細いな腕だら  
かなラインに  
あつ丸そおなみを  
そりむける帯  
蒼びた肩のな  
細いな腕だら  
かなラインに  
あつ丸そおなみを  
そりむける帯  
蒼びた肩のな  
細いな腕だら  
かなラインに  
あつ丸そおなみを  
そりむける帯  
蒼びた肩のな  
細いな腕だら  
かなラインに

の同黒瑞陰覆極むほ浮乳薄そあつ丸  
貌ぞじく々部う端つどか首紫そおなみを  
材長しにとによびの色のたける  
切質いいかいふくが輪布つで蒼びた肩  
れの髪白けてよいふくが輪布つで蒼びた肩  
長布ををてVの字の境目が妖艶な薄紫と  
ので結引き立たせていた瞳覆わられ  
われた頭せいでいた瞳覆わられ  
通つた鼻筋はなかなかの  
され違う事があれば思わず

い造れの切開つれりし道ですれ違う事  
髪作が臓れかきど返、道ですれ違う事  
のにこにてれりもそその表情は瞳ようほ  
少転の深いいたわかは瞳ようほどに  
女が女々た眼かは瞳ようほどに  
がるのと横女生突き  
がるのと横女生突き  
切忍を刺つの止  
切忍を刺つの止  
た死めさる銀のクナイ  
体たの横だ  
の横だ

少女のいでも、先ほどの女忍と同じく

少女の風貌は違つた印象を受ける

少女性が小柄で細身のしなやかな

中身が小柄で細身のしなやかな

少女の未きな為でだらうか

「走った闇疾暗そ見月少ま躰そだ惑鬪少  
走いこつに女だつのがわう者のでありなが  
森の中を東ねられた艶やかな紅髪は

「ひゃぐつ！」  
走るように再び繰り出されるクナイ

紅髪もまた振り向きざまにクナイを放つ

「走るように再び繰り出されるクナイ」  
走るように再び繰り出されるクナイ

丘彼森取彼ひそ落異方をり女たし下様な甲高  
い女のかびと何かが木々の上から

すら走り続けるとそこは草深い草原だつた  
そしてその光が指し示す

後ろに広がる闇夜の森は真の静寂を

上には月、そしてそこは草深い草原だつた  
城がたたずんでいる

「もう少し……」眼中に蒼く陰る城の姿をみとめ紅髪のくノ一

『彩華』はさらに走る速度を上げた

「ご無事であつてください……」白く無慈悲な月の夜を紅い閃光が駆けていく

しかし、彼女の進む道にのびてくる影  
それらもまた、手にした刀剣に月光を帯びた

「ぎいええええ！」血が宙を舞い女の悲鳴と嗚咽が次々と

さらに足を速め女忍の群れへと突っ込んだ  
「ああ！」それだけで、も女たちは少女に向かい特攻を続ける

「ああ！」同連小魚の群れに喰らいつく大魚の捕食を

谷間で切り裂く「二人の女忍の剣を手にした短刀で

吐己女の忍は膝をガクガクと震わせながら血しぶきを

吐き出し続けるほど

さらに、弧を描いた紅髪の少女の剣筋は  
二人目の女忍の乳下を薙ぐ  
「ひああ！いやあいやあああ！」

深くえぐられた傷口から血しぶきをあげて  
仰け反り、そのまま膝をつく  
やがて二人は重なり合い冷たい地面へ沈んだ  
傷口を抑え震え続ける女忍たちだつたが  
やがて二人は重なり合い冷たい地面へ沈んだ



刃二人の末路に相手を向いた。彩華は切り裂いた

手も同じく斃れた仲間など目もくれず

うに回り始めると間合いを取り円を描く

忍月よう光を背にしたその姿が徐々にあらわになつていく

ふたりはゆつくりと間合いを取り円を描く

「京香：紅髪の少女だと呼ばれた女忍は彩華と同じく小柄な

対峙する相手の名をつぶやいた

「少あ短めの茶色の髪、あどけなさの残る輪郭で

ありながらもその瞳は忌々しげに紅髪の

「京香：彩華、ババ力な真似をしたものね……」

蓮様の命令に背いて、城に密告しようとした

「彩愛：らしの声色ながらも侮蔑混じりの言葉に

するなんて：とんだ裏切り者だわ」

「彩華は強く反論する

「どちらが裏切り者よ！主君を見限り他国に

鞍替えするなんて恥だと思わないの！？」

前のかく、あんな若造に

「前の主君ならともかく、この乱世が乗り切れるとも？」

ああ、どうか：あなたは、あの若様に

お熱だつたからね……」

「彩華はギリツと歯を食いしめた

「そのようなことは無い！」

「私は主君をお守りするただそれだけだ！京香、邪魔をするなら容赦はしない！」

「今度は京香が眉間をしかめ叫ぶ

「容赦しないですって？」

「ふざけるんじゃないわよ！力の差なんて

ふざけるんじゃないわよ！いつも、いつも！

ふざけるんじゃないわよ！やつと邪魔な

ふざけるんじゃないわよ！やつと邪魔な

ああ蓮無様に可愛がられるのはあんただけ！

あんたを公然と葬れるんだからね！」

あんたを公然と葬れるんだからね！」

彩華も目を細めて、京香に狙いを定めた

彩華も目を細めて、京香に狙いを定めた

彩華も目を細めて、京香に狙いを定めた

たふこ笑普段で歪ませた京香は怪しくゆらめきながら

たふこ笑普段で歪ませた京香は怪しくゆらめきながら

たふこ笑普段で歪ませた京香は怪しくゆらめきながら

ふん！あんたの癖はわかりきつてるのよ！

ふん！あんたの癖はわかりきつてるのよ！

ふん！あんたの癖はわかりきつてるのよ！

に相手の動きを見つめていた

に相手の動きを見つめていた

に相手の動きを見つめていた

ふん！あんたの癖はわかりきつてるのよ！

ふん！あんたの癖はわかりきつてるのよ！

ふん！あんたの癖はわかりきつてるのよ！

稽古の時とは違うことを見せてやる……

稽古の時とは違うことを見せてやる……

稽古の時とは違うことを見せてやる……

さあ！来るがいい！彩華！

さあ！来るがいい！彩華！

さあ！来るがいい！彩華！

始まりの時を待つていた

息を整え彩華と京香は互いに踏み込む時を

息を整え彩華と京香は互いに踏み込む時を

草原に風がそよぐそして……

「え？」

京香は何か起こったのかわからなかつた  
確かに彩華の初撃は普段と同じ軌道であつた  
しかし、京香がそれに気づいた時すでに  
彩華は己の横をすりぬけていた  
（いつ動いたのだ？いや、見えていた見えて  
いたのに何も反応すらできなかつた）

納彩京香の知る何倍もの速度で繰り出された  
得はで斬撃が自分を切り裂いた……ならば  
同じ速さ同じ軌道それでも避けられなかつた  
反応する間もなく京香の体格に似合わず  
大きく膨れた丸い乳房ごと彩華は彼女の身体を  
切り裂いていたのだから



忍装束が無残に散り、微かな桃色が銀光に  
艶やかに紅色の花火が咲いた  
（そ、そうか……これが『不知火』）  
殺意も無く初動も無く  
ただ無意識に敵を斬る  
『始まり』を知る事もなく火花のように  
血を散らす



ぐらりと京香の身体が揺れた  
（あたし……）  
いつも手加減されていたんだな  
いつも：いつも：いつも：いつも：  
くやしい：くやしいよ：彩華

唇虫た後涙月動歯共横刀を振るい血を飛ばした彩華が振り返る  
をのだ悔ががかをにわけるい幼い血を飛ばした彩華が振り返る  
か音京も流照な食生きぬいた少女から今日まで  
みが香安れらくしなしぬいた少女から今日まで  
みし聞が堵るしていりまつたその子を  
めこ死も悲とは無かつたまつたその子を  
えんだしも怒りもまつたその子を  
始め彩華は我にかえるまつたその子を  
そして……走り出すまつたその子を



高台で走り始める彩華を見つめる者たちがいた。月の光に輝く紫色の髪を腰まで伸ばした女たちは、同じ装束を身にまとっている。ただ、彼女だけは、元を覆つておらず、大人の笑顔を携えた薄紅色の唇が優しげに

「けただ瞳の視線が裏切り者から離れることはできなさいません、蓮様。すぐに仕留めに参ります、ゆくぞ！」

ふふふ、京香じゃ

「そ中央全然ダメだつたわね」

「呼紫色陣の髪風と共に女たちの姿は搔き消えるよ。彩華が血で染めあげられるのを……」

「はっ！」

「も、申して栗髪の女忍がつぶやいた」

「ふふふ、京香じゃ

「けただ瞳の視線が裏切り者から離れることはできなさいません、蓮様。すぐには隠そ主お微色笑顔で、口元を覆つておらず、大人の



「かはつ……ひゅーひゅー！」  
喉元を切られた女忍が両手で首元を抑える  
止めることはできないまま斃れてゆく  
花梨！くそおくそおおお！」



「刃先はそのまま彼女の心の蔵を突き刺した  
「ぐはう！」  
そのまま回転した彩華の蹴りが黒髪の忍びの  
わき腹にめり込む  
「ひぎつ！いやあああああああ！」  
弾き飛ばされた拍子に左乳の剣が抜け  
暗母乳が吹き出すかのように真っ赤な血が  
闇に舞つた



くつあなたまで！」  
見せる彩華

が防戦を強いられる  
風を割る

「そ拳だ倒そ彩当一橙は放彼明  
くつかに焦りの位置色に回り込むよう

彩は次は「そ拳だ倒そ彩当一橙は放彼明  
くつかに焦りの位置色に回り込むよう

彩は次は「そ拳だ倒そ彩当一橙は放彼明  
くつかに焦りの位置色に回り込むよう

「あはっつつはつつつううううう！」  
豊満な乳房がぐにやりとひしやげその派動は  
そのまま心の蔵を貫いた  
はううつはうつう！ボ、ボクがはう！  
止あビニ必負ける：：：：なんて：：：：はつう！  
死に呼吸し身体を震わせていた女忍は  
二歩よろめいて地面へと倒れた  
ビクビクと肩を震わせ荒々しい呼気を  
上げていた彼女の胸の動きがゆくりと



「こ、こんなバカなことがあろうはずない！」

少しおもいに離れた場所で指揮していた栗色の髪の女忍は狼狽してい

たが、これだけの才能ある忍であつたとは言え

指揮官でありながら、彼女に戦意は

すこいから才能力ある忍であつたとは言え

で、指揮官の人数を倒すなど……

殺し背鬼取だなが、このような醜態をさらし、彩華の首を

続けていける状況を見てくる彩華よりも、彼女は

殺すしか、殺すしかないのだ

生意気な小娘を葬るしか己の生き残る道は

下が何人死のうとも！

いかかるのだ！」

鎖をいかけた！ やりました！

や、びた鎖に腕を絡められる

つた！ やりました！

よし！ そのまま引き倒せ！」

栗髪の指揮官は端正な顔を一やりと歪めた

動きさえ封じればこちらのもの……

「はははは！よくやった桃花！  
今夜もたつぱり可愛がつてやる……」

「は、はい！お姉さま！」  
はしゃぐ桃色の髪のくノ一に目配せし  
それまで後方にいた栗髪の女忍がそう叫ぶと  
素早い跳躍でまっすぐ彩華へと走りよる  
「トドメは私がつけてやる！」

「その頭上をかち割つてやる！」  
すぐに鎖が引かれて彩華は無様に転ぶだろう

「裏切り者彩華！覚悟お！」



喜々として女は振り上げた刀を頭上より  
振り下ろす

「きゃあああああ！」

「若々しい女の悲鳴があがつた

薄彩華ではなく彼女を捕らえ歓声を上げた  
桃色の髪をした幼さの残る女忍だつた

「身體上からあらへ一に刀両断にされ若さに満ちていた  
同栗お斬り髪気りのにつなぐ女入けた？」  
らい指だ相手が彩華ではなかつたことに  
体官格はたが若いくノ一だつたことには  
で叫び声をあげてしまふ  
薄桃髪の女忍は



少と勝そ恐引彩華の凄まじい腕力になすすべもなく  
少女の死体を見つめている  
利の怖き命に寄せられ  
いたまま、真つ二つに斬られた薄桃髪の  
少女の死体を見つめている  
利を命を信散らしながら、  
していったのだから彼女の盾となり  
いた栗髪の指揮官は果然  
少と勝そ恐引彩華の凄まじい腕力になすすべもなく  
利の怖き命に寄せられ  
いたまま、真つ二つに斬られた薄桃髪の  
少女の死体を見つめている

「お覺悟を……」  
その彼女を射抜くように冷たい言葉が

「ひい！ま、まつて！降参いたします！」

どうかどうか命だけは！」

即座に栗髪の指揮官は血糊のついた刀を

無様に震える栗髪の女忍彼女の股ぐらからは

ろうことか小水が流れだしている

「あひやう！いたい！痛いい！」

彩華は彼女の足を斬りつけた

「あ前たちはどうする？まだやるか？」

悶大仰にのけぞりながら栗髪の指揮官は

「無彩見無明彩華は周りに残る数名の女忍たちに問う

「お前たちはどうする？まだやるか？」

彩華は彼女の足を斬りつけた

「あ前たちはどうする？まだやるか？」

「れ、蓮さま！」

即肩叫足れ、蓮さま！」

そ即肩叫足れ、蓮さま！」

即座をびを斬られがい

に息を静めたら息があらげていた彩華も

忍衆『茶枳尼』の頭領である蓮だつた

忍衆『茶枳尼』の頭領である蓮だつた

彩華をまっすぐに目指しながらゆっくりと左脇へ手を腰に当てて、柔軟な笑みを浮かべる。右の手は月の黄色い光を反射させた長刀を握りしめていた。さす黒いまとわりつくような空気がその場を支配した。「あら、どうしたの？」優蓮は彩華の周りにいる女忍たちを見回しながら尋ねる。「これで……終わりにするの？」その言葉でタガが外れたのだ。

「いやああ！ いおああああああああ！」死ねえええ！ お願ひ死んでえええ！」

狂気に駆られたように先程まで戦意を失つていた女たちが一斉に彩華に襲いかかる。だが、無鉄砲な突撃は己の命を散らすだけの結果となつた。死んでえええ！ あぶはつああ！」やだああやだよおおお！」

屠腹の肩から乳房まで撫で斬られるものから背に剣を生やすものゆくほどに返り血が彩華を染めてゆく



（私は何をやつているのだろう……）  
呆然とそんなことを考えながら体に流れる  
彼破紅い狩人のいや殺戮者の血がかつての仲間を

「誰やうそたが顎をぬらすだけ：：：」  
「鮮血の舞をしてそのかした女は一人で  
ひとりとその様を眺めていた女たちは  
も動かなくなつていていた女たちは  
群がつていた女たちは

「生戦しま息を整えてから、髪も身体も心も真紅の血に  
みれた少女はゆっくりと顔をあげた

「最後の敵に向かって：：：」  
「生きに望む二人の間に一人だけ無様に  
ひてゐる者がいた

「あ：：：はう：：：蓮さま：：：」  
「お許しを：：：」

「歩ひ蓮這荒彩華おに足を切られた栗色の女指揮官が  
はいは必ず息をあげながら、己の主人のもとへ  
み寄つて来たつすぐ彩華のほうへと  
蓮さま：：：お慕い申しております

薄ら笑いを浮かべようやく彼女の足元に  
通り過ぎるかに見えた  
「静かにしてちようだい」  
蓮はそう優しく囁いて、右手の長刀を部下の  
ビヤウツ

吹き出した返り血が蓮の頬を濡らす  
「はぐう！？」

地面に縫い付けられた女忍は背に突き  
刺さった剣を抜こうと届かぬ手足を  
バタバタと動かしながらもがく  
その様は採集された虫のようにも見えた

「いやだあ……まだ死にたくないいい……」

彩長哀蓮運動ビ栗絶  
華刀れは返きを止め相のまま  
のもとへ歩いてくる  
の部下に突き刺さる  
の抜こうとせずそのまま  
の刃を抜き止めを拭おうとも  
の刃を抜くと大さくのけぞつて  
の髪の女忍相のまま  
の髪の女忍相のまま



「蓮さま、こ微自然と喉が鳴る。これまで、何が起ころうと震えることのなかつた彼女の刃が……」

「浮そ師女忍の頭領であり、己を忍として育てくれた」

「ああ、やつぱり素敵だわ……『返り血で』」

「向嗜かみ締め己を殺戮者として育て上げた女に

「何故です蓮さま！なぜ、ご主君を

「消彩華こ我裏切る道をお選びになつたのです！」

「強いもののが生き、弱いものが死ぬそれだけすこの事よ、少しでも生き延びる為なら」

「明や「で、どちらに死線の範囲を越えているにもかかれて、蓮は彩華のそばまでやつてきた



「言つたでしょ？素敵な贈り物だつて……  
これが、裏切りの報酬なの」

「あたしに接触してきた隣国の女妖術師  
『紅丸』が作った特別な媚薬よ？」

「彩華は一瞬目の前が真っ白になつた。  
あなたがつて人は！：：：：：」

「見下すように蓮はうすら笑いを浮かべる。  
あなたがいけないのよ？あたしの想いを  
受け入れてくれなかつたんだもの……」

私はあなたのですべてが好きなの！

太刀筋も、それに：：：：  
かつての仲間ですら躊躇なく葬る  
太刀筋も、それ：：：：

彩華は汗をにじませながら必死に淫欲の衝動に  
耐え続ける

「あはう：：：：：あふうう：：：：」

それでも、腰に力が入らず彩華は片膝を  
ついてしまう

濡らし始める  
彩華の忍装束から、蜜液がにじみでて地面を

「うふふ。布越しだつたのにすごい効き目ね  
量を間違えたら廃人になっちゃうわね

手に下げた魔性の布袋を見つめて蓮は  
つぶやいた

「ああああああああああああああああああああ  
はうくう」

離れて崩涙と涎をこぼしながら、紅髪の忍は前めりに  
泣れさせてしまつた

「ああああああああああああああああああ  
だめだめえ！」

「あはうああ！」「こんなのがだめえ！」

「ひたすらに抑え続ける紅髪の少女を

「あはうああ！」  
先程まで決死の想いで暗闇を駆けていた彼女が

冷たい地面に転がり、血と砂にまみれた彩華を  
頃合かじらね：…

「あはううう：…」  
蓮はそつと抱き起こすと快楽に浸る愛弟子の  
くくるしいくくるしいですう

柔優見むせび泣く彼女を少し困ったように  
しきく撫でる。血と砂に埋もれていた彩華の  
白い肌があらわれた

「ふふふコレね……我慢し続けると  
狂い死にするそ、うよ？収める方法は  
ただ一つ……わかるわよね？」  
青ざめる彩華を嘲りながら蓮は耳元に  
甘ったるい息を吐きかける  
「苦しい？どこが苦しいの？言つて  
ごらんなさい」

微笑みの悪鬼は、哀れな少女を偽りの優しさで  
包む  
少女はそれが欺瞞だと分かつていても  
抵抗することができなかつた



「ここですう！わたしのここがあ！」

「ここって……いま手で押さえてる

場所ね？」

「はい！……そこです……くるしいです蓮さまあ！」

もつと淫らな言葉を言わされると思っていた

少女は一瞬ほつとした

：：：だが



「ここ？ここなのね！ほら！

「ここなんですよ！くるしいのは！ほら！」

「あぎついいい！ひぐうううううううううう！」

無造作に突き込まれた指は、彼女に狂えと  
引き言わんばかりに彩華の小さな蜜壺を  
搔き回した

「ひつひやううううう！こらめでええすう！」  
「びくり、びくりと何度も彩華は  
のけぞりながら邪悪な媚薬と薄笑いを  
浮かべる女忍の指で汚された  
「うふふふ。可愛いいちばんかわいいわあやった  
悪魔は己に抱きかかえられたまま」  
「あんちゅ」



「静まりかえった闇夜の中に、ただ、ふたりの  
あえぎ声だけが未だに聞こえていた  
「静まりかえたのね：：：：」  
「ようやく、私のものになってしまった  
くれたのね：：：：」  
「抵抗できぬまま少女はその唇を許してしまった  
声だけが未だに聞こえていた

お体験版「紅髪のくノ一」

お読みいただきありがとうございます

pixivでも活動しております  
「敵女イエッイエッ」と検索すれば  
見つかると思いますので  
よろしければ遊びに来てください

サークル「フリートーム」  
代表「イエッイエッ」